

学習意欲を高める国語科学習の展開

—伝統的な言語文化に関する考察—

How to Better Motivate Elementary School Students to Learn Japanese Language:
Teaching Traditional Japanese Language Mores

仲井文之 水上義行
Nakai Fumiyuki Mizukami Yoshiyuki

はじめに

文部科学省では、平成20年(2008年)3月に小学校学習指導要領の改訂を行い、平成平成23年度(2011年)から完全実施している。

今回の国語科改定の要点は、次の7点が挙げられる。

- (1) 目標及び内容の構成 (2) 学習過程の明確化 (3) 言語活動の充実
- (4) 学習の系統性の重視 (5) 伝統的な言語文化に関する指導の重視
- (6) 読書活動の充実 (7) 文字指導の内容の改善

この中で、(5)伝統的な言語文化に関する指導の重視は目新しく、各要点との関連が随所で図られている。まず、(1)の② 内容の構成の改善では、これまでの「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の3領域及び〔言語事項〕での構成を改め、3領域と〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕にしている。次に、(4)〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕の中で、「言語文化とは、我が国の歴史の中で創造され、継承されてきた文化的に高い価値をもつ言語そのもの、つまり文化としての言語、また、それを実際の生活で使用するによって形成されてきた文化的な言語生活、さらには古代から現代まで各時代にわたって、表現し、受容されてきた多様な言語芸術や芸能などを幅広く指している。」との定義し、「今回の改訂では、伝統的な言語文化に低学年から触れ、生涯にわたって親しむ態度の育成を重視している。」と、意義を強調している。さらに、(4)アでは、各学年の系統を表で表され、一目で分かるようにしている。¹⁾

本稿は、「伝統的な言語文化に関する指導」が児童の学習意欲を高める中で行われ、目標とする「生涯にわたって親しむ態度の育成」が図られることを、学校その他で行われている事例をもとに明らかにしようとするものである。

事例1-昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせ

〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕領域の「ア 伝統的な言語文化に関する事項」では、低学年で「昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること」が取り上げられている。

読み聞かせは、これまでは担任が行うものと受け止められがちであったが、保護者や地域のボランティアの協力を得たり、学校図書館司書を積極的に活用したりして行う学校が増えてきている。学校図書館司書については、近年、全国の小中学校に配置されるようになり、図書管理の業務以外に読み聞かせの技術等も研修で身に付けており、専門的な立場から、学年に応じた本の紹介なども併せて行えば、児童が民話や昔話に親しむのにより効果的であると考えられる。ここでは、平成23年度全国読書活動推進校として文部科学大臣表彰を受けた小矢部市立大谷小学校の事例を取り上げることとする。²⁾

(1) 学校での読み聞かせ

今では、全国ほとんどの小中学校が朝読書を実施している。授業前の一定の時間、静かに読書することは、一日の学校生活を始める上で児童に情緒面での落ち着きを与える。大谷小学校でも、毎朝、約12分間の朝読書を行っている。通常は、学級文庫や図書室から借りた本を読むが、学期に1回のペースで校内読書週間があり、その際には地域ボランティアや無担任の教師が各教室に出向き、読み聞かせ「読み取りの会」を行っている。

「読み取りの会」で読まれる本は、学級担任が児童の実態に合わせて選び、低学年では民話や昔話を中心に選ぶ場合が多い。地域のボランティアの方々は、地域にある児童図書館から借りた大型絵本や大きな紙芝居を使い、登場人物になりきって話をされることから、児童には好評である。

(2) 地域ボランティアによるパネルシアター

年に数回、休み時間に、全校の児童が自発的にランチルームに足を運ぶ日がある。その日は、地域ボランティア「ひまわりグループ」の「パネルシアター」が開く日である。パネルシアターは、一種の人形劇で、会場の灯りを消した中で行われる。演目は、地域に古くから伝わる民話が多い。高さ2メートル、横3メートルの掲示板に黒い布が掛けられ、それが舞台となる。その上に、民話の登場人物や、家屋、森、神社、寺社など、手作りの切り抜きが配される。切り抜きには蛍光塗料が塗られ、暗闇の中で色鮮やかに光り、浮き出して見える。ボランティアの語りが始まると、舞台では登場人物が動き、背景が変わる。何とも幻想的で民話の世界がそこにある。あくまで参加は自由であるが、いつも部屋は満員になる。こうした地域ボランティアの積極的な活動で、児童はさらにお話好きになっていくようだ。

(3) 児童図書館での読み聞かせ

大谷校区には児童図書館「おとぎの館」がある。この図書館と学校は緊密に連携をしている。小学校に入学してしばらくすると、1年生全員が図書館を訪問し、図書の扱い方や

借り方等を学ぶ。同時に、読み聞かせやパネルシアターなどを体験する。休日にも、読み聞かせやパネルシアターは開催されており、個人または親子で来館し楽しむ。対象は幼児にも広げられ、幼いころから民話や昔話に親しむ環境が整えられている。

事例2-文語調の短歌や俳句の指導

「ア 伝統的な言語文化に関する事項」の中学年の指導事項は、「やさしい文語調の短歌や俳句について、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすること」とある。また、『学習指導要領解説国語編』では、「文語調の短歌や俳句」では、教材として、親しみやすい作者の俳句を選んだり、代表的な歌集から内容の理解しやすい歌を選んだりすることや、地域に縁のある歌人や俳人、地域の景色を詠んだ歌や句を用いることを挙げている。また、短歌や俳句を自分で作ってみることで、よさを実感し、音読の意義を深く理解することになっているとしている。

ここでは、伝統的な学校行事と俳句指導で成果を挙げている、高岡市立伏木小学校の事例を取り上げてみる。³⁾

高岡市伏木には、かつて越中の国府があり、国司として大伴家持が赴任し、6年間を過ごした。後に家持は万葉集の編者となり、この地で詠んだ歌を万葉集に数多く納めている。伏木小学校は、明治6年、富山県最初の公立学校として創立され、創校記念日には児童が「能 高砂」、「舞 かたかごの花」を演じるなど、伝統文化を大切にしている。

(1) 越中万葉かるたで和歌に親しむ、

高岡市には、大伴家持が越中で詠んだ和歌100首を集めた「越中万葉かるた」がある。正月には、「越中万葉かるた大会」が開かれ、市内小中学校の代表が、対抗でカルタ取りを競う。会場の体育館では、児童生徒が床一面にカルタをはさんで向かい合い、上句が詠み上げられるやいなや、鋭い気合いが飛び下句の取り札を競う。ギャラリーには保護者、学校関係者で埋まり、熱気が会場全体を包む。

この大会に出場するためには、学校代表枠4人に入る必要がある。伏木小学校でも、大会の1ヶ月前くらいから連日、放課後に5・6年生が残り、カルタ取りの練習に励む。

100首を暗唱し、取り札の場所を覚え、読み札が詠まれたと同時に反応できるまでに鍛える。児童は、行事への参加を通して和歌に親しみ、地域の自然や文化の理解を深める。

(2) 高学年が演じる「舞 かたかごの花」と「能 高砂」

伏木小学校では、創校記念日の祝芸として、全校児童、保護者、地域住民を前に、5年女兒が「舞 かたかごの花」、6年生が「能 高砂」を演じる。「舞 かたかごの花」は、家持の歌「もののふの 八十娘子らが 汲みまがふ 寺井の上の かたかごの花」に音曲をつけ、それに合わせて5年女子児童が舞う洋舞である。市内各小学校にも、その地に因む家持の歌があり、音曲に合わせた創作洋舞がある。

「能 高砂」は謡曲「高砂」を児童が謡い、能を舞うものである。戦前からある伝統行事で、地域の指導者から数ヶ月にわたる指導を受け、練習を重ねた後によりよく舞台発表

となる。創校記念日には児童、保護者、地域住民の前で披露される。

和歌や謡いがこのように地域に根ざし、児童に受け継がれていることはめずらしく、地域、保護者の理解と協力があればこそ続いてきたと思われる。

(3) 全校挙げて俳句作りに親しむ

伏木小学校の校内を歩くと、廊下や階段の踊り場に、全校児童の一人一人が作った俳句が掲示されている。半紙1枚を縦半分に切り、学年、氏名とともに俳句が一句書いてある。紙一枚が一人の掲示スペースで、新しい句ができるとその上に新たな一枚が重ねられ、作句の記録ともなる。児童が作った句は、素直で、子どもならではの視点で表現されている。紙の隅には、俳句大会での成績も記されている。毎年、全国各地で開催される俳句大会には、全学年から出品され、知事賞や議長賞、教育長賞など、上位の賞を受賞している。平成20年度全国学生俳句大会の学校対抗では代表5人の句が認められ、全国の小中高大大学校の中で優勝を果たしている。

このような成果を継続して挙げることができるのは、普段から友達や先輩のすぐれた句を目にしていることと、俳句作りに親しむ環境ができていることが大きい。

中学年の授業で行われる俳句・短歌の指導以外に、夏季、冬季、学年末等の長期休業期間に、全校児童を対象に俳句作りの課題が出される。これは以前から続いている課題であり、児童も家庭も当然のことと受け止められている。児童は、よい俳句を詠みたいという意欲があり意識も高い。これに応じて担当の栃原百合子教諭は、俳句のきまりや、詠むときのこつなどを、友達の作品をもとにした解説を配っている。こうした努力の積み重ねが、さらに俳句作りへの関心を高めることに結びついている。

事例3-狂言の指導（光村6年「伝統文化を楽しもう」の授業実践から）

「我が国の伝統と文化の継承という観点に立てば、初等中等教育の段階では、『古典学習は面白い』と感じさせ、古典を学ぼうとする意識を高めることが必要ではなかろうか。」と、町田守弘氏は述べている。⁴⁾ これには全く同感である。

それでは、どのように指導したら児童に感じさせることができるのか。ここでは、平成23年度小矢部市教育委員会指定 学力向上研究発表会で授業公開された大谷小学校の南明子学級の事例⁵⁾について取り上げたい。

南教諭は、光村6年<伝統文化を楽しもう「伝えられてきたもの／狂言 柿山伏／柿山伏について」>を教材とした。公開授業で参観者の目を引いたのは、狂言「柿山伏」の音読にペア学習で取り組む児童の姿だった。6年生がペアになり、日頃馴染みのないはずの狂言の音読に、動作まで付けて表現している。積極的でしかも楽しそうな様子に驚かされたのである。周囲の目を気にしがちな年頃であり、このような姿を望んでも現実に目にすることは少ない。どのような指導がなされてきたのか。本時に至るまでの指導の経過を辿ることにする。

(1) 教材としての魅力－単元構成の工夫－

まず、教材としての魅力を単元構成にみることができる。本単元は3つの教材で構成されている。「伝えられてきたもの」では、俳句や古文などを挙げ、文字がなかった時代から、江戸時代までの日本文学史を簡単に解説し、古典芸能を紹介している。「狂言 柿山伏」は、現代の人の考えと通じる、親しみやすい。音読することにより、文語の調子に親しみ、また内容の大体を知ることができるよさがある。「柿山伏について」は、古典とは何か、狂言の世界と現在との共通点や相違点を分かりやすく述べている。

(2) 段階を追い、丁寧な指導で関心と自信を持たせる

魅力的な教材を用いてどのように指導していくか。実際に児童が古典に親しむには、幾つもの超えなければならない壁がある。児童には、なぜ何百年も前の文章が現在でも読まれているのか、なぜ古典芸能が続いているのか、など、古典に対して学習経験がほとんどない。また、音読とは言え、狂言独特の言い回しへの抵抗、人前での工夫を示すことへの不安などから、表現が消極的になり、親しむという目標が達成しにくいことが考えられた。

そこで、時間をかけた丁寧な指導を重ねて、狂言への理解、親しみの気持ちが醸成されていった。

① 単元の導入に、男性教諭二人による「柿山伏」の音読を聞く場を設けた。市販のCDの利用も考えたが、身近な教師二人が楽しそうに音読する様子を見て、表現への意欲が高まった。

② 「柿山伏について」は、狂言師山本東次郎氏による「柿山伏」の解説書である。その中で氏が語る、古典は「人間とは何かを教え、生き方について考えるヒントを与えてくれるお手本のようなもの」、狂言とは「誰の身にも起こり、誰もが経験しそうな出来事を描いたもの」、「人間はかしこさもおろかさも、みな同じようにもっていて、それを理解すれば、広い心でいたわり合いながら、仲よく楽しく生きていける」という考えを学んだ。また、社会科「室町文化」の学習で伝統芸能について調べ、文化の特徴や室町時代に起こった文化が現在でも人々に親しまれている理由について考える場をもったり、調べたことを教室に掲示する「狂言コーナー」を設けたりした。

このような学習を通して、古典の背景を理解したり、昔の人のものの見方や感じ方と自分たちとを比べたりして、関心と理解を深めていった。

③ 音読発表会の実施を学習計画に組み込み、目的意識と見通しをもたせた。その上で、二人で行うペア学習や、二組のペアでグループを作り、音読を見せ合ったり、助言や評価を行ったりするグループ学習を行った。

また、音読の練習の際には、ワークシートに「音読するところ」、「伝えたいおもしろさ」、「おもしろさが伝わるような読み方の工夫」を記入し、それを意識して練習した。

さらに、練習の振り返りのワークシートには、「分かったこと・気づいたこと・工夫したこと」、「次に生かしたいこと」を文で書き記した。また、「評価の観点」として4項目（「○ 作品の内容が分かり、登場人物になりきって練習することができた。」、「○ 狂言独特の表現や調子のおもしろさを楽しんで音読することができ

た。」「○ 音読の工夫を増やすことができた。」「○ 友達によさ（読み方・考えなど）を見つけることができた。」）を示し、できていれば、○を鉛筆で塗りつぶした。

これら一連の学習を通して、互いに認め合い協力し合う関係が育ち、一人一人の音読表現への意欲を高めるとともに、観賞する目の確かさが次第に育成されていった。

(3) 公開授業の概要

本時は次のように進められた。

- ① 学習課題「『柿山伏』のおもしろさが伝わるように読み方を工夫しよう。」を確認する。
- ② 「柿山伏」のおもしろさを紹介し合う。
- ③ 「柿山伏」のおもしろさが伝わるようにペアで音読練習をする。
- ④ ペアで工夫した読み方を教室の友達に紹介する。
- ⑤ 学習の成果を確認する。

A児は、見つけた「柿山伏」のおもしろさを紹介し合う②の場で、「カラスの鳴きまねをすることをレベル1と考えてください。身せせりをして鳴かなければいけない片手を使う猿のまねはレベル2です。とびは、羽をのして鳴きます。両手を使うのでレベル3です。最後、木から飛ぶことは手も足も放すのでレベル4です。このようにどんどん難しくなっていくところがおもしろいと思います。」と説明を工夫し、分かりやすく伝えた。

③の音読練習でB児のペアは、山伏が木から飛ぶ場面を取り上げた。伝えたいおもしろさは、柿主が山伏に動物のまねをさせておもしろがり、山伏がこまる場所を取り上げている。おもしろさが伝わるようにするための読み方として、柿主はだんだん早口になり、山伏は弱々しく言うことにした。また、C児のペアは、山伏が看病せい、と柿主に文句を言う場面を取り上げ、山伏のいかりを伝えたいとし、「やいやい」を強く言ったり、実際に腰を打たせたり、相手をじっと見たりと役柄になり切ることを目指そうとした。

④の紹介の場では、男同士あるいは男女のペアが前に出て、椅子に上ったり、とびのまねをしたりしながら山伏役を演じ、音読表現を教室全員で楽しんだ。

⑤でD児は、「おもしろさが伝わる読み方にするためには、独特な調子で言ったり、感情をこめて言ったりすればよいと分かりました。」と手ごたえを感じていた。またB児は、「ものまねがおもしろさだと自分も書いたけれど、殺される！までつながっているとは考えられませんでした。それくらい困りながらものまねをしていたんだと分かりました。」と、読みの違いに気づき、これからの読みに生かしたいと結んでいる。

以上のように、狂言との出会いの場を工夫し、段階を追って、丁寧な指導を重ねた結果、「狂言は、見る人もする人も楽しめるおもしろいもの」という意識で学習を進めることができ、十分に親しむことができたと思われる。事後の研修会では、児童の学習意欲のすばらしさが話題になり、よりよい人間関係がその基盤になっていることが共通した意見だった。「失敗したけれど、よかったよ」という友達を思いやる発言に心和む思いがしたとの感想があったことも付け加えておきたい。

おわりに

以上みてきたように、伝統的な言語文化に関する指導は、これまで地域社会が大きな役割を担い、保護者の理解と協力を得て行われてきた。地域によっては言語文化の継承と後継者の育成が順調に行われてきている事例や、学校現場で、国語科だけでなく生活科や総合的な学習の時間を活用して指導している事例も数多く挙げることができる。ただ、このような例は必ずしもは全体的な動きではなく、地域の伝統行事が後継者難で廃れてしまった例や、学校の授業で喚起された児童の興味・関心を生かす場がないことも事実である。

言語文化は幾世代にわたって伝えられてきた文化である。そこには、古来日本人が大切にしてきた心、季節を感じ、海、山、川等の自然を敬い畏れる心、他への慈しみの心、庶民の生き様等もまた同時に伝えられてきている。これが、古典が今日まで残る大きな意味があり、伝えていく意義であると考えられる。

今後、伝統的な言語文化に関する指導の重要性が認識され、生涯にわたって親しむ態度を育成するには、そこに込められてきた日本人の心を伝えると同時に、

- ・学校現場での指導が系統的かつ継続的に行われる必要がある。
- ・学校と地域が密接に連携し、伝統的な言語文化に関する指導にゲストティーチャーとして地域人材がかかわったり、地域の伝統的行事に児童が参加する機会を増やしたりする。

ことが大切になると思われる。

参考文献

- 1) 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 国語編』 (東洋館出版社 2009)
 - 2 国語科改訂の趣旨 3頁～8頁
 - 3 国語科改訂の要点 6頁～8頁
 - (4) 伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項 23頁～24頁
- 2) 小矢部市立大谷小学校『平成23年度 全国読書活動推進校実践表彰推薦書』(2011)
- 3) 高岡市立伏木小学校『平成21年度 学校教育計画』(2009)
- 4) 町田守弘 編著 『実践国語科教育法』 (学文社 2012)

第8章「古典の授業—伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項の扱い方と言語活動」吉田 茂 93頁～105頁
- 5) 小矢部市立大谷小学校『学力向上研究発表会 6年2組国語科学習指導案』(2011)

小矢部市立大谷小学校『平成23年度 研究紀要』(2011)

南 明子 伝統文化を楽しもう「伝えられてきたもの／狂言 柿山伏／柿山伏について」